

二松學舎大学 人文学会第112回大会

研究発表

〔13時30分～14時45分〕

平成27年
12月5日(土)

13:30～(開場13:00)

会場：二松學舎大学九段キャンパス
1号館401・403教室

申込不要・聴講無料
会員以外の方も参加できます

第Ⅱ会場
(403教室)

第Ⅰ会場
(401教室)

政治から遠ざかる「私小説」

——三浦哲郎『忍ぶ川』 受容に見る一九六〇年の「文学場」

二松學舎大学文学部国文学科4年 伊豆原潤星

『古今和歌集』における「ほととぎす」詠について

二松學舎大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程2年 渡辺香苗

洪邁の経書解釈について

——游酢の言説を巡る朱熹との差異——

二松學舎大学文学部中国文学科3年 桜井亮介

『東坡書伝』の研究 ——明德慎罰について——

二松學舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士前期課程2年 早川桂央

作家 柴崎友香氏

いま、この場所から、小説を書くこと

講演会 (401教室) 〔15時00分～16時00分〕

総会 (401教室) 〔16時10分～16時25分〕

懇親会 (11階会議室) 〔17時00分～19時00分〕

二松學舎大学人文学会事務局

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

TEL : 03-5962-3304 E-mail : jinbun@nishogakusha-u.ac.jp

- 東京メトロ東西線・半蔵門線、都営新宿線「九段下」駅下車、2番出口より徒歩8分
- JR中央線(総武線)、東京メトロ有楽町線・東西線・南北線「飯田橋」駅下車、徒歩15分
- JR中央線(総武線)、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅下車、徒歩15分

※会場には駐車場がありません。お車でのご来場はご遠慮ください。



二松學舎大学人文学会第112回大会

【日 時】平成27年12月5日（土）13：30～（開場13：00）

【会 場】二松學舎大学九段キャンパス1号館401・403教室

受 付 13：00（1号館4階エレベーター前）

〈研究発表〉 13：30～14：45

第Ⅰ会場（401教室）

政治から遠ざかる「私小説」——三浦哲郎『忍ぶ川』受容に見る1960年の「文学場」

二松學舎大学文学部国文学科4年 伊豆原潤星

『古今和歌集』における「ほととぎす」詠について

二松學舎大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程2年 渡辺 香苗

第Ⅱ会場（403教室）

洪邁の経書解釈について — 游酢の言説を巡る朱熹との差異 —

二松學舎大学文学部中国文学科3年 桜井 亮介

『東坡書伝』の研究 — 明德慎罰について —

二松學舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士前期課程2年 早川 桂央

〈講演会〉 15：00～16：00（401教室）

いま、この場所から、小説を書くこと

作家 柴崎 友香氏

〈総 会〉 16：10～16：25（401教室）

〈懇 親 会〉 17：00～ （1号館11階会議室）

二松學舎大学人文学会事務局

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16 / 03-5962-3304 / jinbun@nishogakusha-u.ac.jp

政治から遠ざかる「私小説」

——三浦哲郎『忍ぶ川』受容に見る一九六〇年の「文学場」

文学部国文学科四年 伊豆原 潤 星

一九六〇年という年は、一九五〇年代から続く冷戦構造の確立そして安保闘争と、政治の季節の只中であつた。文学史的に見れば、一九六〇年は、「私小説」が再受容された年である。「私小説」とされる小説が多くの文学賞を受賞するなど、「私小説」再評価の機運が高まつていた。そんな中で書かれた三浦哲郎『忍ぶ川』（『新潮』一九六〇年十月）は「私小説」として受容され、同年の下半期芥川賞を受賞する。「私小説」が再受容された背景として、政治的な文脈を忌避する意識が考えられる。安保闘争という政治の嵐が吹き荒れる中、自ら嵐に飛び込む者が多くいる一方で、嵐を避けようとする者も多くいた。同時代的な「私小説」は政治から遠ざかろうとする「文学場」（ブルデュー）の要請の下で書かれたものと言えよう。中でも、『忍ぶ川』の選評を見ると、「古い」という評価が目立つ。「古い」私小説として受容された『忍ぶ川』には、他の「私小説」作品よりも一層現在との隔たりが見出されていたのではなからうか。本発表では、安保闘争などの政治と、同時代の文学との関わりありを中心にして、『忍ぶ川』ひいては「私小説」が何故一九六〇年という年に受容されたのかを明らかにしていきたい。

『古今和歌集』における

「ほととぎす」詠について

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年 渡 辺 香 苗

『古今和歌集』（九〇五年）は、四季の部それぞれの季節において詠まれる景物が異なり、特に春と秋について生物を詠んだ歌が多い。一方で、冬に詠まれる景物は、雪や川といった無生物のみである。これらの特徴は、『古今和歌集』が自然との関りに沿って詠まれた歌の配列を意識していることを示していると考えうるが、注目すべきは、夏部で詠まれている生物が「ほととぎす」のみということである。三四首中、二八首が「ほととぎす」に関する歌であり、そこには、「ほととぎす」に対する撰者の強い意識が窺える。「ほととぎす」は、『万葉集』の時代から暦や季節と深く結び付けて詠まれた。農耕生活に寄り添った自然詠のほか、その鳴き声や飛び回りながら鳴く習性から、恋歌にも多く詠み込まれる。また、「死出の田長」の異名もあるが、『古今和歌集』の哀傷歌において詠まれた「ほととぎす」歌は二首のみである。

本発表では、「ほととぎす」に付随する和歌的な観念を追い、『古今和歌集』成立にあたって、どのような観念が取捨されたのか述べる。さらに、『古今和歌集』夏部と、その他の部立における「ほととぎす」歌の詠みぶりを比較し、その特異性について言及したい。

〈研究発表〉 第Ⅱ会場

洪邁の經書解釈について

——游酢の言説を巡る朱熹との差異——

文学部中国文学科三年 桜井亮介

南宋に生きた士大夫、洪邁に『容齋隨筆』という著作がある。その内容は多岐に渡るが、中には儒学の重要な概念に独自の解釈を述べた所謂經学と呼べるものも散見する。經学といつても朱熹のように經書に綿密な注を施すといった形式とは異なるが、当時の士大夫の思考営為のひとつの典型かと思われる。

洪邁（一一二二—一二〇二）と朱熹（一一三〇—一二〇〇）とは同時代を生きた。朱熹により再構成された儒学すなわち「朱子学」の出現により、同時代の士大夫達による朱子学とは異なる思考営為は、後世その陰に隠れ勝ちである。洪邁によるそれもそのひとつであり、今まで思想史の上で取り上げられることは少なかった。しかしだからこそ洪邁の思考営為から当時の士大夫一般の思考の典型をうかがえるのではないかとも思われる。

今回、『論語』の「夫子之道、忠恕而已矣」と『中庸』の「忠恕違道不遠」との整合性を論じた『容齋隨筆』所収の「忠恕違道」章を取り上げ、そこで引用されている游酢の言説を巡る洪邁の思考営為を辿り、彼がどのような「忠恕」観を導いたかを先ず考えたい。また洪邁と朱熹とがそれぞれ游酢の言説の何を採用し何を捨象したかを比較することで、それぞれの思考の特質を浮かび上がらせたい。

『東坡書伝』の研究

——明德慎罰について——

文学研究科中国学専攻博士前期課程二年 早川桂央

宋代を代表する文人である蘇軾が著した『東坡書伝』は、北宋期に著された尚書注釈書で唯一完全な形で現存しているものであり、北宋の經学を研究する上で重要な資料とされている。しかしながら『東坡書伝』に於ける先行研究は多くない。主要な先行研究は、宋代尚書学の中の一注釈書として、その全体像を捉えようとする傾向が強く、『尚書正義』や蔡沈『書集伝』等の前後の主要注釈書との関係の中で論じているものは少なく思う。

宋代の經学は、劉敞『七經小伝』、王安石『三經新義』が画期となり、經書の新解釈が行われるようになる。蘇軾も經書の新解釈を行った一人であるが、普遍的な性質と権威を持った經典に注釈をつけるという行為は、何かしらの目的意識が働き、前時代の解釈を改めるに至った何かしらの思惟が存在しているはずである。

本発表は、蘇軾が新解釈を立てた目的を明らかにするために、『尚書正義』との比較を行いその特異性を考察する。また蘇説が以降の尚書注に与えた影響についても考察したい。今回は『尚書』の中心的思想の一つである「明德慎罰」という古代政治思想について述べられている「康誥」「酒誥」「梓材」三篇を中心に解説を進める。

〈講演〉

いま、この場所から、小説を書くこと

作家 柴崎友香

〈講師紹介〉

一九七三年、大阪府生まれ。一九九九年、短篇「レッド、イエロー、オレンジ、オレンジ、ブルー」が文藝別冊に掲載されデビュー。同短編を含む二〇〇〇年に刊行された『きょうのできごと』は行定勲監督によって映画化され、話題となる。

その後、『その街の今は』で二〇〇六年度芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞大賞受賞、咲くやこの花賞を受賞。

二〇一〇年、『寝ても覚めても』で野間文芸新人賞受賞。二〇一四年「春の庭」で芥川賞受賞。

他にも『主題歌』『ベリジアン』『虹色と幸運』『わたしがいなかった街で』『パノララ』、エッセイ集「よそ見津々」「よう知らんけど日記」など著書多数。

◆会場のご案内

二松學舎大学九段キャンパス一号館

〒一〇二一八三三六 東京都千代田区三番町六一十六

TEL 〇三一五九六二一三三〇四 (国文学共同研究室)



- 東京メトロ東西線・半蔵門線、都営新宿線「九段下」駅下車、2番出口より徒歩8分
- JR中央線(総武線)、東京メトロ有楽町線・東西線・南北線「飯田橋」駅下車、徒歩15分
- JR中央線(総武線)、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅下車、徒歩15分